

## 「この人に聞く」成熟社会と建築

(株)意匠計画 代表  
安河内 敦子



### ■ステンドグラスを始めたきっかけはどのようなことからですか。

ステンドグラスとの出会いは、もともと私は建築がやりたくて、綜建築研究所を手伝っていて、そのご縁で旭硝子の開発部に入れてもらったことからであり、どちらかという素材からガラスに入っていました。

それから、アートの勉強にイタリアに行って、ステンドグラスの工房で修行している時期に、ヨーロッパでは、モダンステンドグラスがちょうど盛んになり始めでした。ミラノでは教会の宗教画としてのステンドグラスだったのですが、ドイツとかアメリカでは、モダンステンドグラスの抽象的な表現事例をたくさん見ることができました。それで、日本でもこういう表現だったら建築の中で仕事ができるなという思いを強くして、ステンドグラスを始めました。

ステンドグラスをはじめとしてアートは、建築の中で、非常に重要なパーツだと思っています。

ただ、なかなか建築と作家は対等の立場になれないジレンマがあり、建物にとってアートは重要なんだという声を発信したいという思いがあります。

### ■ステンドグラスに使われるガラスは各建物固有の色なのですか。

ステンドグラス修復ではヨーロッパの場合、何百年も続く工房がつくっているわけで、伝統の技法は記録保存継承され、色板ガラスについても、各色板ガラス製造工場が秘伝の調合を持っており、この色のガラスだったらこのメーカーだというのがわかるぐらいです。新しいガラスの表現というのが生まれてきていますが、過去の歴史的なガラスはきちんと保存されています。

### ■国により製作方法が違うのですか。

ステンドグラスは、ヨーロッパで生まれ、主に教会を飾りました。クリアな色板ガラスを絵柄に合わせて切り、陰影をつけて鉛線で組んでパネルにするというステンドグラスは、陰影をつけるステインという表現からステンドグラスという言葉が生まれたといわれています。1940年代アメリカでは、ティファニーが細かい表現に向く新しい技法を開発し、ランプシェードや細密な植物などの表現をしています。

ヨーロッパの場合は作家と工房とは別で、工房は作る場所です。だから、技

術は伝承し、古いもの、壊れたものの修復もやるし、現代作家の作品も作る。作家は、ステンドグラス技法を知っていて原画を描いて、ガラスを選んで製作させるのであって、自分が作ることはしないのです。だから、私はイタリアで技法を知りたくて工房の職人の世界に入ったのです。日本にはそういう世界がなかったので、自分で絵をかき表現して、自分で作って取りつけるというすべてをやることとなった訳です。

ステンドグラスの板ガラスはドイツ、フランス、アメリカから主に入ってきて、輸入のルートさえわかれば自分で手に入れることができるので、私は工房を持って制作するようになりました。

私は10年ほど前に文化庁の留学で、ドイツに行き、大きな工房を見学したり、板を製作している工場にいったりしてきたのだけれども、ドイツは職業学校にステンドグラスのジャンルがあって、そこで勉強している人たちがいっぱいいました。

■建築とアートとのコラボレーションをどの様に図られていますか。

建築の中のステンドグラスはインパクトが強いので、空間づくりに影響力があります。影響力がある分だけ、建築家は躊躇するというか、自分とうまくコラボレートできない限り使いたがらない。

いかに上手にコラボレートするかというのが、作家側でも心得なくてはいけないところだと思います。図面段階での空間把握、私自身で模型もつくり、そういう中で効果、見え方等を検証しながら建築家の理解を得る取り組みをしています。

■これからやってみたいことはどの様な分野ですか。

今、リサイクル瓶を素材にして、ステンドグラスや壁画制作に取り組んでいます。＜瓶ガラスは捨てればごみ、心を込めるとアートになる。＞ガラスは扱い方ひとつで輝きを増し、古の時代に錬金術としてガラスが生まれたように、エコが叫ばれている今、再び瓶ガラスのリサイクルアートが錬金術のようにアートとして存在していけると思います。

川崎市の消防庁舎の壁面では、消防少年団の子供たちに瓶を集めてもらって加熱変形させ、タイルに張り、それを子供たちに壁面に張ってもらいました。子供たちが大人になって、自分の子供に「これはお父さんが張ったんだよ。」と言える、そういう街とのコラボレート、人とのコラボレートができ、そのきっかけがリサイクルであれば、いろんなメッセージが発信できる気がします。これからもそんな仕事を広く発信していきたいと考えております。